

濱田雅子の「服飾からみた生活文化」シリーズ 第24回

テーマ「写真が語るアメリカの民衆の装い（その4）ー1880年代の民衆の生活文化を垣間見るー」

濱田雅子

1 はじめに

2021年11月28日から『写真が語るアメリカの民衆の装い』というテーマで、濱田雅子の「服飾からみた生活文化」の講座を開催して参りました。今回は4回目（濱田雅子の「服飾からみた生活文化」シリーズ第24回）となります。お陰様で本講座の基礎的文献である濱田の新刊書『写真が語る近代アメリカの民衆の装いー Guidebook of Joan Severa: Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900-』（株式会社 PUBFUN 2022年4月15日）も無事、出版に至りました。本書は、濱田のライフワークであり、例えば、1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災以来の激動の空間と時間をくぐり抜けて、誕生に至りました。何か一つでも欠ければ、このような書物をPOD出版することは能わなかったものと思われます。

今回は、表記のテーマで、前半（1880年代）、後半（1890年代）に分けて、お話させていただきます。前半は2023年2月23日に、後半は7月に予定しています。

本講座の資料

Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion*(1840-1900), Kent State University Press, 1995, p.592

『写真が語る近代アメリカの民衆の装いー Guidebook of Joan Severa: Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900ー』（株式会社 PUBFUN 2022年4月15日） 電子書籍 アマゾン

2 前半の要旨

前半の講座は、本書に掲載された1880年代の写真分析がテーマである。

本講座では、女子服を部位別・服種別にフランスのファッション雑誌“*La Mode Illustrée*”掲載のファッション・プレートに観られる衣裳と比較・考察する。

ヨーロッパでは、1880年代は、クリノリン衣裳の後を受けて、バスル衣裳が女性の衣服の中心であった。日本では鹿鳴館を舞台に、洋装化が進められた。

鉄道建設と先住アメリカ人の駆逐によって1890年までには、将来合衆国に含まれることになる大陸のほとんど全域に農場、牧場、鉱山、そして大小の都市が見出されるようになった。

1900年代の初頭までに、農村の入植者と近代社会をより密接につなぐ二つの変化が現れた。第一の変化は、1870年代ないし1880年代に始まったシアーズ・ローバック社などのメールオーダー会社が拡張され、工業社会の生産物がほとんどすべての人々に利用されう

るようになったことである。農民たちはもはや情報不足に悩まされることはなくなり、ほとんど毎日彼らの家に手紙、新聞、広告そしてカタログが届けられるようになった。

この時代には、すぐに拘束性の高いハイファッションがなくなったというわけではなく、ハイファッションと家庭裁縫の衣服を共に見ることが出来るのである。

女性の社会進出はファッションに影響を及ぼしたが、女性の労働着の特徴として、上流階級の女性のハイファッションと、直接現代の衣服に通じる活動的な衣服の並存が挙げられる。

1880年代の女性ファッションの特徴は、バスル衣裳の登場であると同時に、1890年代に広まった現代衣裳へ近づく衣服を垣間見ることが出来ることは大変興味深い。

本講演のまとめは、以下の通りである。

1880年代の女性のファッションの特徴について、セヴラ女史は、以下のような注目すべき見解を述べている。箇条書きで紹介させていただく(Joan Severa, p. 390)。

① 1880年代には、ドレスの新しい選択肢が増えたこととドレスの入手方法の変化により、選べるスタイルがかつてないほど種々雑多になった。またファッションブルなドレスそれ自体にも最高にビビッドな変化が起こった時代であった。

② この時代の最大の特徴は、仕事を持つ女性と家庭の主婦にとっての常識的な選択肢が極めてたくさんあり、それらは高級なおしゃれ着とは大きく異なっていながら、それでいて高級なおしゃれ着の流行と深く関係していたことである。間違いなく、働く女性たちと健康を意識する活発な女性たちの意見が大きくものを言い、なにもかもがもはや海外から指図されたものではなかった、という点にある。

③ ファッションやドレスについて書かれたアメリカの新聞雑誌の記事は、かつてなかったほど、少数の恵まれた人々ではなくもっと多数の人々をターゲットとした。目的の2本柱は、貧しい女性でもしやれたファッションを手にするようにすることと、すべての女性が自分のライフスタイルに応じて必要な実用的ドレスを着られるようにすることであった。

④ そうでありながらも、女性の服には相変わらず本当の着心地のよさはなかった。働く女性の写真を見ても、どんなに「シンプルな」ドレスのスタイルであろうが、コルセット、細い袖、動きにくい長いスカートが写っている。この面での進歩は遅々としていた。

⑤ とはいえ、あらゆる経済レベルの人に共通して普段着として受け入れられるプレーンなドレスを見出すべく調整を行うなかで、1880年代の女性は高級服の最先端の流行の束縛から、それまでで最も離れることができた。

⑥ もっと重要なことに、1880年代末になると日常用のドレスとある種の「芸術的」ドレスのスタイルがファッションに影響を及ぼしはじめ、コルセットの圧政の終焉を告げる先触れとなった。簡素で着心地の楽な大量生産の衣服が、ついに視野に入ってきたのである。